

V

KOBE COLLEGE
NEWSLETTER

Vistas

“Beauty Becomes a College”



38

2020・November

●Published by KOBE COLLEGE

神戸女学院大学

●学生寮における新型コロナウイルス感染症への対応

他者のことを想い、
考えるきつかけに

— 自治的共同体への主体的関わりを軸に —

●体育研究室の2人の研究と教育
公園と身体近代化／みんなでつくるダンス— 5
体育研究室 小坂 美保 准教授 / 安田 友紀 専任講師

時流を取り入れた新スタイルの英会話スクール— 9
—アーティストとファンの関係性を築く—

美人英会話 代表
クラーク記念国際高等学校 非常勤講師
株式会社MONA concept 所属モデル 亀井 優希 さん

KC トピックス— 11

Mary and Grace Stowe Memorial Dormitories

学生寮における新型コロナウイルス感染症への対応

と、発症しても長期療養ができないこと、医療機関への斡旋が困難な状況であること等を鑑みての判断です。

連絡は、グループLINEを使って文書を送付。特に重要な内容に関しては、学生部長と舎監との連名で保護者宛に郵送しました。

——前期閉寮は急な展開だったのですね。学生へのサポートも大変だったのでは？

在寮生が寮を出た時点では、まだ前期閉寮が決まっていなかったため、教科書や衣類などの私物を個室に置いてままの学生も多かったです。来寮して搬出した学生もいますが、実家が遠方であるなどの理由で搬出が難しい場合には、それぞれ必要な物をメールで知らせてもらい、私達が2人体制で部屋に入って梱包、発送しました。作業は大変でしたが、「本棚の何段目にある」など、寮生による的確な連絡により、スムーズに発送できました。また、清掃やごみ処理などが必要な個室については本人の許可を得て作業をしました。

新入生は、入寮式やオリエンテーションなども実施されないうまま閉寮になったことと思います。例年、四役を中心とする有志の上級生が開いている学科別懇親会ですが今年もLINEを使って遠隔で実施し、履修相談にも対応してくれました。3月の新入生入寮時にも、ボランティアで集まった上級生が荷物



郡司 房代 氏



松崎 美加 氏



竹田 やよい 氏



中野 敬一 教授

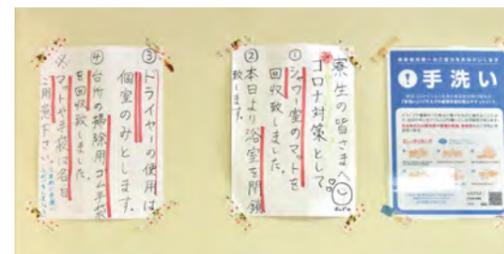
他者のことを思い、考えるきっかけに

——自治的共同体への主体的関わりを軸に——

- 学生部長・学生寮運営委員長 中野 敬一 教授 —— NAKANO Keichi
- 舎監 郡司 房代 氏 —— GUNJI Fusayo
- 舎監補 竹田 やよい 氏 —— TAKEDA Yayoi
- 舎監補 松崎 美加 氏 —— MATSUZAKI Mika



閉寮中の寮の個室。定期的な換気が行われている



このたびの新型コロナウイルス感染拡大に伴い、女学院の学生達が生活する「メアリー・アンド・グレイス・ストウ学生寮」は、4月13日から8月7日の前期閉寮を決定した。当学生寮は、岡田山キャンパス内にある地上4階建て、西館・北館の2棟から成る建物。176ある居室は、全て洗面・トイレ付きの個室タイプで、共有スペースとしてダイニング・キッチンや洗濯室、シャワー室、浴室がブロック毎に設けられている。運営の統括を務める学生寮運営委員長の中野敬一教授、寮生を生活全般にわたってサポートする舎監の郡司房代さん、舎監補の竹田やよいさん、松崎美加さんに、閉寮決定の経緯や入寮生へのフォロー、今後の感染防止対策等について話を聞いた。

新型コロナウイルスの感染拡大を受けて

——学生寮ではいつ頃からどのような対策を実施したのですか？

寮生への第一報は2月中旬です。貼り紙と放送、グループLINEも使い、何か症状があればすぐに連絡するよう注意を呼びかけました。その後、玄関への消毒液設置、浴室の閉鎖、ドライヤーや掃除用ゴム手袋等の共有物の使用禁止……と、順次、対策を進めていきました。

当学生寮は四役と呼ばれる寮長1人と副寮長3人に加え、部長、副部長、班長、副班長が中心となって自治的共同体を運営しています。今回のコロナ禍でも四役が中心となって、自ら注意書きを作成して貼り出したり、手分けしてグループLINEで呼びかけたりと、積極的に協力してくれたので、大きな混乱もなく迅速に周知することが出来ました。

——閉寮決定までの動きについてお聞かせください。

4月7日の緊急事態宣言発令を受け、13日～5月11日までの閉寮を予定して8日に寮生へ通知しました。その後、前期の全授業オンライン化が決定。それに伴い、前期いっぱい閉寮が決まり、27日にその旨を通知しました。閉寮の決定は、寮生の健康と安全を最優先に考えること、共有スペースが多くクラスター発生のリスクが高いこと

年間行事や教育プログラムについて

——これまで、学生寮では様々な年間行事が実施されてきました。中止による影響が大きいのでは？

残念ながら、前期に予定していた入寮式・保護者懇談会・オリエンテーション、ウェルカムパーティー、わかば祭、消防訓練、寮長選挙、個室大掃除など、すべての行事が中止となりました。ですが唯一、キリスト教教育で最も重要な讃美礼拝は、これまでと同様、毎週水曜日の夕刻に、オンラインにて続けています。事前に担当教員に録画を依頼し、Moodleという教育管理システム上に動画をアップ。感想を提出してもらおうという方法です。学生からは、この困難な時においても感謝することの大切さや不平不満を言うだけでなく、他者のために何ができるのかという視点を持ち行動することの大切さなど、礼拝を通して学んだことが語られました。私たち学生寮職員も学生達の言葉に貴重な気づきを与えられることが多くありました。

また直接集うことは叶いませんが、礼拝は後期も続けます。学生にとって自分自身を見つめ直し、他者の苦しみや悲しみに思いを寄せ、祈りを捧げる時間、そして心の安らぎがもたらされる時間になればと思います。

——今後のフォローについてはいかがでしょうか？

経済的支援としては、授業のオンライン化に伴うネット環境の確保などを目的に、寮生に限らず全学生に対して一律50,000円の「緊急支援給付金」が支給されました。また、寮は利用実態が無いため、寮費をいただかないことにしました。後期は対面授業の寮生のみに使用を許可しますが、交通費等の負担を考慮して同様の対応をとりま

Mary and Grace Stowe Memorial Dormitories

Q.1 コロナ感染拡大に際して、四役の皆さんが実行したことを教えてください。

感染が拡大する中、寮では速やかな感染防止策への対応が求められ、時には深夜遅くまで対策を考え実行に移しました。様々な情報があり、正しい対策を立てることが難しかったです。そのような中、浴室のマットや台所の掃除用ゴム手袋など共有物の撤去、ポスターの貼り出し、放送等での呼びかけ等、寮生に感染防止策について周知徹底しました。予定してきた行事が中止となり、それまでの準備が無駄に感じることも多く、気を落とすこともありました。遠隔での新生入親睦会を企画するなど、感染防止対策以外にも力を尽くしました。

これだけの働きができたのは、日頃から四役同士、そして班長や部長たちと様々なことについて話し合ってきた経験や、新生入を含む寮生全員の協力によるものだと思います。改めて、舎監の先生方や寮生の皆さんに支えられていたことを実感しています。卒業まで私たちができることを精一杯やってまいりたいと思います。



寮長
●文学部
総合文化学科 4年生

「コロナ禍で深まる人との絆」—学生寮・四役に聞く

Q.2 新生入向けの科別懇親会やその他の寮生へのサポートについて教えてください。



副寮長

●人間科学部 環境・バイオ
サイエンス学科 4年生

新生入向けの懇親会は、毎年年度初めに上級生有志と新生入が学科ごとに集い、親睦を深めることを目的としています。今年は新型コロナウイルスの影響で閉寮となり開催が危ぶまれましたが、新生入は新しい環境で友達もまだ出ていない状況の中不安だろうと思い、履修登録や大学生生活、寮生活についての不安を解消したり、友達を作るきっかけとなる機会をぜひ作ってあげたいと、四役で企画してオンラインで開催することにしました。LINEのグループ通話機能を利用して、新生入の方々話しやすいように少人数のグループに分けるなど工夫をしました。依頼した上級生有志が皆快く引き受けてくれたことは大変心強かったです。新生入からも感謝の言葉を頂き、開催して本当に良かったと感じています。学生寮の良さである「縦にも横にも繋がりができた」ことで、新生入の不安も和らいだのではないかと思います。後期も閉寮が決まったため、4年生による就活相談会など他学年に向けてのオンラインでの交流の企画も進めています。

Q.3 閉寮前後、困ったことやどうやって様々な問題を克服しようとしたか教えてください。



副寮長

●文学部
英文学科 4年生

私の実家のある地域には高齢の方も多く、「もし私が新型コロナウイルスに感染していたら」と、家族だけでなく地域の方への感染拡大も心配でした。そのため最初は寮に残りたいと強く思っていたのですが、集団生活での感染リスクの高さや近隣の医療体制の状況について知ることができ、閉寮を受け入れることができました。帰省後2週間は自室に籠り、周囲との接触を控えるよう努めました。地元の方々があたたかく迎えてくださったことは、私にとってコロナ禍での困難を乗り越えるための大きな心の支えとなりました。就職活動への影響も心配し、落ち込んでいた際、寮の友人たちからのメッセージに励まされ、改めて寮の温もりに気づくことができました。沢山の方に支えられ、閉寮や就職活動に向き合うことができたと感じています。コロナ禍での学びを活かし、将来は、人と人との交流の大切さや地方にある魅力を伝える仕事に就き、自分が他者を支える側になりたいと思っています。

Q.4 閉寮期間中も続けられた讚美夕拝が寮生にとってどのような意味合いを持ったか教えてください。



副寮長

●文学部
総合文化学科 4年生

お夕拝では、日中のオンライン授業で聞く学問的な内容とは異なり、心の持ち方についてのお話を聞くことができ、自分を振り返る貴重な機会となりました。閉寮し、寮生と離れ離れになってしまったことで、日頃寮友の存在がいかに心の支えになっていたかを実感しました。そのような中で閉寮中もオンラインで守り続けられたお夕拝は、自らが寮という共同体の一員であることを思い出し、寮生の存在を思う時間となりました。寮生との深い信頼関係を築くことができたのも、お夕拝で出会った先生方のお言葉の一つ一つを、心に留めていくことができたからだだと思います。印象に残っている奨励の一つに、人は互いに弱い面を認め合い、弱さを知るからこそ他者に優しくなれる、というお話があります。生活の場を共にしているからこそ見える、友人のありのままの姿を無条件に受け入れ、異なる価値観も認め合っていくという心のゆとりを育む時として、週に一度心を休め、静かに自分を振り返るお夕拝の時は、私たち寮生の精神的な軸となっています。オンライン授業が続く日々の中で、自分ばかりを見て心を閉ざしてしまおうになる時、お夕拝の時を通じて、意識を外の世界へと向けていきたいです。そして、隣人と共に互いに仕える者として歩んだ学生寮の日々と、日常の中で心休まる時を持ち続けることの大切さを、これからも忘れずにいたいと思います。



(オンラインで実施された新生入親睦会)

それぞれに困りごとは異なりますので、引き続き、個別の相談に応じていきたいと思っています。加えて、学年毎に共通した困りごとや課題もありますので、それに応じたサポートを検討しています。新生入はまだ寮生同士の交流も十分でないことから、遠隔での親睦会を企画しました。また、3年生にはOGによる就職活動相談会を実施する予定です。この就職活動相談会は、コロナ禍の寮生を心配した卒業生から、私に何かできることがあればとの提案をいただき実現しました。コロナ禍だからこそ生まれた新しい交流の機会です。学生寮の良さが活かされる交流の機会をこれからも検討してまいります。

— 同様に、防災教室や防犯教室などの教育プログラムも中止になったとか。

例年、防災教室では寮生全員で消防訓練を実施し、消防署の方に講話をいただいています。また、防犯教室では警察署の方を講師としてお招きし、スティーカーやDVなど女性が巻き込まれやすい犯罪やサイバー犯罪についての対策を教えてくださいたいです。その他、健康講座やキャリアガイダンス、アルバイト労働環境についての講座など、どれも学生からの要望に応えるかたちで実現してきた大切なプログラムです。今後は形を変え、オンライン開催する方法を考えてまいります。

協力し合い、安心して過ごせる環境を

7月1日から前期期間中に対面授業のある寮生が帰寮しているそうです。現状、どのような対策をとっているのでしょうか？

各所に消毒液を設置し手指消毒ができるようにしました。また、職員が定期的に換気や消毒を行っています。寮生以外の立ち入りは原則禁止とし、寮生以外の宿泊も禁止。寮生の外泊も禁止です。寮生には個室外のマスク着用を義務化し、消毒液利用と手洗いがいっしょに励行、毎朝の検温と体調報告の義務化、他の寮生の個室への移動を禁止しています。公共場所に関しては、洗濯機は一人一台にし、乾燥機は最大2名を指定して名札を設置。シャワーブースも一人1カ所に指定し、使用後



は各自で掃除することになっています。台所は調理のみ可能とし、ゴミは各自で処分することに。また、それぞれ使用表への記名も義務化しています。他にも様々な対策を導入しています。

が、現状での帰寮者は10人程度のため、問題なく生活できています。後期はさらに帰寮者が増えるため、消毒液を大幅に増設し、寮生各自でも公共場所の使用前後に消毒を行ってもらいます。

先にも述べましたが、本学生寮は定められた規則を守るだけでなく、寮長や班長、各部の部長を中心とした自治的共同体への主体的な関わりも、大切な教育の一環として運営されています。そのため、寮生は日頃から自分達で案を出し合い、必要なことは書いて貼り出し、全体集会で四役や各部長が協力を呼びかけ、別の方面から班長も協力を促す——という姿勢が身に付いてい

ます。常に寮生同士が声をかけ合い、コミュニケーションをとっているため、感染防止対策に関しても私達の指示をただ待つのではなく、共に相談しながら生活していく体制が生まれています。今後も、学生達とアイデアを出し合い、相談を重ねながら、とにかくクラスターが発生しないよう、細心の注意を払って対策をとってまいります。

隣人のために出来ることを考えるきっかけに

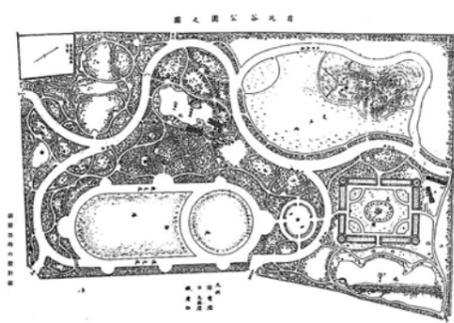
寮生へのメッセージをお願いします。後期も多くの学生がオンラインによる授業を続けることとなりますが、実り多き学生生活を送ることが出来ることを祈っております。これまで体験したことのない困難な状況ですが、得られることはあります。自分自身のためだけでなく、隣人のために何が出来たのか？自身の感染予防はもちろんですが、他者を思いやり、相手に感染させないという視点を持ち、今回の事態を隣人のことを考えるきっかけに、また、物事を多面的に考える機会、自身が成長する機会にしたいだけだと願っています。

学生寮では、来年度の再開に向け、みなさんが気持ちよく寮生活を送っていただけるよう寮内環境の維持に努めております。職員一同、またみなさんと共に生活を送れますことを楽しみにしております。



▲(左)日比谷公園噴水之光景(昭和12[1937]年複製) 明治38年ごろの様子と推定できる (右)日比谷公園之真景(明治36[1903]年10月)

▼開設当時の日比谷公園の設計図: 本多静六氏による



—日比谷公園の開園はいつですか?—
できたのが日比谷公園なのです。公園で運動することが、今は当たり前前にはできませんが、それがいつからできるようになったのか、学校以外の場所でも動かしたり、スポーツをすることを、人々がどのように受け入れ、現在に続くような形になってきたかを、当時の社会的なできごとや教育、社会制度、日常生活などと照らし合わせながら、公園における運動空間の意味を考えています。

小坂 明治36年です。日比谷公園は何もない土地に、設計案から作り上げられました。西洋風であることが重視され、園内には花壇があり、馬車道、園路が整備され、噴水もありました。そこに大きな競争路が付いた運動場も作られました。近代化をめざした明治政府が帝都東京を整備する中で、重要な場所と位置づけて、それまで日本にはなかった洋風公園を作った。その力を入れて作った場所で運動ができたということが面白いと思うんです。
また、開園に合わせて、日本体育大学の前身の民間団体が、運動器具、鉄棒などを建設寄付して、体操ができる空間を、運動場とは別に作っています。軍隊式の体操で使う機械器具も設置されていました。そこには明らかに、体を鍛えてほしいという意図が読み取れます。当時の学校での運動は義務的、強制

“公園が果たした 人々の健康とスポーツ観”

—日本人のスポーツ観は今と昔では違うのでしょうか?—
小坂 明治時代は、スポーツはまだ一部の人のためのものでした。現在のよう

—当時のことはどのようにして調べられるのでしょうか?—
小坂 文献と当時の写真、絵葉書、絵画、錦絵などを、丹念に当たっていきます。文献は新聞記事や日比谷公園が舞台になった当時の小説や日記ですね。そういう作家が日比谷公園を好んで書いたとか、どういう場面で使われたとかというのを書き留めます。たとえば、永井荷風の日記や小説、お雇い外国人のドイツ人医師ベルツが書いた日記とか。運動している姿が描かれていなくても、散歩している女性の描き方などから、当時の日比谷公園はどういう場所だったのかな、といったことを読み込んでいきます。

—小説・錦絵・写真から見える 変わる日本人のスポーツ観—
的にやらないといけないものでした。でも、公園ではやるものも、やらないものもその人次第。おもしろそうだし、やってみようかと自ら進んでやる。その楽しさがあり、遊びがあるところが公園は学校と違う。明治・大正期は強く、健康的で、秩序的な動きができる、そういう身体の近代化が求められました。そのために重要な役割を果たした場所が、学校以外では公園だったのではないかと、というのが私の考えです。

—スポーツが一般的になったのも、ここ60年ぐらいのことだと思えます。スポーツは、語源的には広く気晴らしや楽しみを指す言葉でしたが、それが次第に意味が狭まって、日本に伝わってからはルールに則った身体運動を指すようになりました。

明治の頃は、お雇い外国人の先生たちが学生を集めて「今日は野球をやらう」とか「ボートを教えよう」という、すごくゆるい感じでやっていたものが、特に野球が広まっていくことで、いわゆる日本式の武士道野球のようなものが出てきて、他のスポーツもだんだん遊びがなくなってきました。
しかし、1970年以降、スポーツそのものを楽しむことが前面に出てきて、今はただするだけでなく、見る、支える、知るなど、いろんなスポーツの関わり方が出てきています。そういう変遷はおもしろいと思います。



▲『風俗画報』日比谷公園之図(明治36[1903]年10月)

● 体育研究室の2人の研究と教育

公園と身体近代化

● 体育研究室
小坂 美保 准教授 — OSAKA Mibo

みんなで作るダンス

● 体育研究室
安田 友紀 専任講師 — YASUDA Yuki

神戸女学院大学のすべての学生にとって必修科目である「健康スポーツ科学」の授業を担当するのが、体育研究室の小坂美保准教授と安田友紀専任講師。二人には“体育の先生”という顔とは別に、研究者の顔もある。小坂准教授はスポーツ社会学、体育科教育学を専門とし、安田専任講師はアダプテッドスポーツ、ダンスを実践研究してきた。



ミニトランポリンの授業



■小坂美保(おさか・みほ) — 香川大学教育学部卒。岡山大学大学院教育学研究科修士課程修了。奈良女子大学大学院人間文化研究科博士課程単位取得満期退学。修士(教育学)。兵庫教育大学大学院助教を経て、2016年より神戸女学院大学体育研究室に。専門はスポーツ社会学、体育科教育学。(公財)日本レクリエーション協会の資格、レクリエーション・インストラクター、レクリエーション・コーディネーターを所持。共著に「スポーツの「あたりまえ」を疑え!」晃洋書房刊、「今更でよう、身体のシンフォニー」叢文社刊。

■安田友紀(やすだ・ゆき) — 大阪体育大学体育学部卒。大阪体育大学大学院修士課程スポーツ科学修了。小学校1年から18年間、山本紗内恵バレエスクールでクラシックバレエを学ぶ。大学院在学中から、障害のある子どもたちのダンスグループ「アマカマ・ドゥ」を指導。大阪体育大学助手、大阪体育大学健康福祉学部専任講師を経て、2017年より現職。日本ダンス・セラピー協会認定のダンスセラピスト資格を所有。共著に「アダプテッドスポーツ概論」東京教学館刊。

● 小坂美保准教授に聞く



—帝都東京に出現した洋風公園 日比谷公園になぜ運動場が?—
—体育研究室で担当している授業を教えてください。—
小坂 私たち2人と非常勤の先生で、必修科目「健康スポーツ科学」を担当

し、1年生全員を受け持ちます。2年生以上は選択科目「生涯スポーツ」を用意して「スポーツと社会」といった講義科目、「フィットネス」などの実技科目の授業を行っています。
—研究では、それぞれ異なる領域を専門にされていますね。小坂先生のご専門は?—
小坂 専門はスポーツ社会学と体育科教育学です。最近では都市におけるスポーツ空間の形成過程について研究を進めていまして、特に東京の日比谷公園について研究しています。
—なぜ、日比谷公園なのですか?—
小坂 近代的な公園制度のもとで、日本で初めて運動空間をもった公園とし



●安田友紀専任講師に聞く

▼障害も年齢も性別も関係ないダンスで分かち合う空間と時間

安田先生はどんな研究をされているのでしょうか？

安田 私はダンス(ダンス・ムーブメント・セラピー)とアダプテッド・スポーツを専門分野とし、実践研究に取り組んでいます。

ここでいうダンスとは、流行のフリをみんなが揃って踊るといったものではなく、動きを介したコミュニケーションをはかることに重点をおいたものです。



ダンスでは、障害の有無、年齢、性別、ダンス経験の有無も関係なく、誰もが楽しんでダンスを創造する「インクルーシブダンス」に取り組んできました。その実践として、大学院生とから、知的障害の子どもたちをもつ保護者の方々が立ち上げたダンスグループを指導し、2014年から4年間、地域交流事業として「みんなで作る発表会」インクルーシブ舞台の創造「地域・教育・医療の連携」を毎年開催しました。

このイベントは、タイトルの通り、2歳から70歳を超える参加者の方々がみんなが集まって、一緒にコミュニケーションを取りながら楽しんで作り上げたダンスを披露する発表会です。

インクルーシブダンスの指導は、どのようにするのですか？

安田 たえば、音楽をかけながら、メンバーが自由に踊るところを見ながら、ある1人の動きをみんなで見ながら、そのままだんすにししたりします。たまには、メンバーの1人が、みんなが踊っている真ん中で座り込んだり、動かなくなったりすることもあります。でも、それが作品の成長する瞬間になります。その子を無理に動くようにさせるのではなく、「じゃ、誰々ちゃん座っているから、その周りをみんなで作ってみよう」と声をかけ、動きを提案していきます。その子が動かないのも、そういう形でそこにいたいという表現だから、否定せず、やりなさいということも言わないようにします。もちろん、声をかけてほしいのかなと思つたら「休憩する？」とか、「やる？」とか声をかけます。その一言で動きの中に入ってくれる子もいます。でき上がった舞台を見て、「ただ走り回ってるだけ」という人もいますが、参加者はやらされているのではなく、走る、座る、立つ動作だけでもすごくきれいに、輝いて見えるんです。

“ダンスやスポーツを通して一人ひとりの多様性を大切に”



(写真上)インクルーシブダンスワークショップ (右)2017年に開催された発表会のパンフレット

▼やりたい人に合わせて楽しむアダプテッド・スポーツ

なぜ、そのようなコミュニケーションを大切にしているダンスに、関心をもつようになったのでしょうか？

安田 私は小学校1年生からクラシックバレエを習っていました。先生に考えていただいた動きを覚え、理想とする動きになるよう練習を重ね、いかに綺麗に踊るか。でも、高校生の頃かな、「ダンスってなんやる？」と思いはじめ、踊ることがすごく嫌いになった時期がありました。

そんなふうに、もやもやしたまま大学では創作ダンス部に入りました。顧問の先生が障害者グループのダンス指導をされていて、そのアシスタントを4年間させていただきました。その障害者グループのダンスを初めて目にした時、メンバーが思うままに踊っている姿にすごく感動しました。踊るって本当はこういうことなのだと教えてもらった感じがしたのです。

それから、古今東西、唯一無二である一人ひとりの多様性を大切に、時空間を共に分かち合いながら、みんなで作って、みんなで踊るようになりまして。それが、今の研究につながっています。

アダプテッド・スポーツとは？

安田 参加する人たちに合わせてルールや用具を工夫して楽しめるようにするスポーツです。ルールや用具を工夫することで障害の有無や年齢、性別も含め、誰でも参加できるというものです。また、「やりたくない」を「やりたい」となるために、環境を工夫することも含まれると思います。

人には身体が持つ潜在的な力があり、スポーツや身体活動を通し、人と関わることで、その力は引き出されると私は思っています。その機会を損なうことなく、多種多様な人々が共に潜在的な能力を開花させるツールとして、アダプテッド・スポーツは魅力があると思います。

▼コロナ危機の今だからこそ体育研究室にできること

前期のオンライン授業は、どんな授業をしたのですか？

小坂 1年生の健康スポーツ科学はオンライン型でした。Moduleでネット上に上げた資料を学生がダウンロードして、それを見て運動とか健康に関する知識を学ぶのと、ストレッチなどの課題をしてもらいました。

安田 自粛で家にずっと籠っている不健康な状態の中、筋力を下げないように敏捷性、柔軟性、持久力などを高めるトレーニングを課題にしました。

小坂 それと、コロナ禍の今は健康面、精神面の管理に気をつけなければいけませんので、2人で話し合っ、学生には毎日の生活記録をつけてもらうことにしました。2週間に1回提出してもらい、担当教員に伝えたいこと、今困っていることがあれば自由に書いてくださいという欄も設けました。悩みなどの書き込みに対しては、1つ1つフィードバックを返すようにしました。オンラインだからこそ踏み込んだ個人的な相談ができるという面もあったように思います。

他の教職員の立場ではできない、体育研究室だからできる役割があるのですね。

小坂 体育の授業は、一緒に体を動かして普段の講義科目とは違った姿をとることができる、学生にとってはちょっとホットする時間だと思うんです。担当



する私たちは、コロナで大変な今だからこそ、余計に彼女たちが安心して学べる環境をつくり出し、相談しやすい存在になれたらと思っています。

私の印象では、女学院の学生の半分ぐらいは運動があまり好きではないかなって思います。彼女たちにいきなりスポーツを好きになれとは言わないから、体を動かすって楽しいし、心地いいものだって感じてほしい。それで、もう少しやってみようかなって思ってくれたらいいですね。

安田 大学には用具が結構充実していて、ゴールボール、シッティングバレーボール、ボッチャといったパラリンピックの正式種目やキンボールのようなニュースポーツもできるし、バランスボール、ステップ台、ミニトランポリンも、クラス全員が1台ずつ使って授業ができるだけの数があります。今はできませんが、そういうものも使って楽しいと感じてもらえる授業を行ってきたいです。キャンパス内をウォーキングしながら、要所要所で歴史を紹介したりする、女学院ならではの授業もあります。

未曾有の新型コロナ禍を経験している最中ですが、どんな時にも、どんな事も乗り越えていくことができるよう、自分自身を労わりながら、トレーニングしていくことができたいと思います。



「1つの言語が話せるだけで、こんなにも世界は広がるんだ！」英語の教員、モデル、起業家……と、既存の枠に囚われず、活動の幅を広げる亀井さん。そのターニングポイントは、大学時代の中期英語留学だった。アメリカカレッジツバークのチャタム大学で、10カ国以上の人と仲よくなり、それぞれの国の文化に触れないことは詳しい友達に教えてもらいながら、全てをオンライン仕様で切り替えた。「モデル業では自分が前面に出てやってきたけれど、今回はプロデューサーとして裏方に回ろう」。そう考え、ShionちゃんをメインにSNSの配信も始めた。すると、瞬く間にTikTok 17万人、Instagram 2800人とフォロワー数が急上昇。「SNSマーケティングは私の得意分野。フォロワーの増やし方など、モデル事務所が教わったことを起業に活かすことができました」。人気の秘密は「美人英会話」は先生と生徒ではなく、アーティストとファンの関係をとっていること。通常の方法では大手スクールに勝てないけれど、ファンをお客様ではなくファミリーと捉える。その感覚なら、新しいスタイルを確立することができると思ったのだとか。狙い通り、フォロワーから次々に申し込みが入った。



■亀井優希(かめい・ゆき)
2017年文学部英文学科卒業。三木東高等学校、加古川南高等学校、東播工業高等学校の非常勤講師を経て、18年3月にMONA conceptモデル事務所に所属。併行して、同年5月よりクラーク記念国際高等学校梅田校の非常勤講師、20年3月より同校天王寺校非常勤講師に着任し、現在に至る。20年1月「美人英会話」設立。



▲カフェバーに用意されているボードゲーム

各自その場で答え合わせができるようにした。2カ月かけて教材を作り、今夏にスタート。こちらも実施が決まった途端に申し込みが入り、既に一番人気のレッスンになっているという。

【毎月一つは新しいことを】
今後の展望を聞いてみると「毎月一つ、必ず新しいことをしようと思っています」と返ってきた。「9月はオンラインサロンを始めました。これは、さらに近い距離で、楽しみながら英語を話せるようになるコミュニティ。月1回オンラインファミリー会にご招待するほか、コミュニティ専用アカウントを作成し、一緒に発信しながら英会話に必要な知識を増やしていきます。お茶やランチをするオフラインのイベントも開催しますよ」。

また、「LINDA HOSTEL 106」の共同企画「週末お泊まり留学プラン」も間もなく始まる。「今はコロナの影響で、留学したくてもできなくてうずうずしている人がいっぱいいます。そんな人達が大阪で外国人とカフェ巡りをしたり、「美人英会話」のレッスンを受けたりと、国内にいながら海外留学のような体験ができます。このプロジェクトはクラウドファンディングで支援を募り、目標金額を大きく超えて達成した。「全LINDA HOSTEL 106から始まったので、これからは恩返しをしながら、BE Family(美人英会話ファミリー)をさらに大きくしていきたいです」。時流に乗って軽やかに進化する亀井さんと「美人英会話」から目が離せない。

【教員とモデル、二刀流に挑戦】
「1つの言語が話せるだけで、こんなにも世界は広がるんだ！」英語の教員、モデル、起業家……と、既存の枠に囚われず、活動の幅を広げる亀井さん。そのターニングポイントは、大学時代の中期英語留学だった。アメリカカレッジツバークのチャタム大学で、10カ国以上の人と仲よくなり、それぞれの国の文化に触

て感動した。「英語を使う仕事をしたという自身の軸ができました」。英語に携わりたい、何か起業して証を残したい……。漠然としているけれど想いは強く、まず出来ることとして英語の教員になった。けれど、起業の方法や何をもって起業したいのかはわからないまま。そこで、知り合いに相談を持ちかけたところ、思いがけずモデル事務所を紹介された。「どんなビジネスで

起業するにしろ、影響力を持つてからの方がうまくいく。まずは教員とモデルの二刀流に挑戦してみたら?」。後押しされがんばってみることに決めた。モデルとしては雑誌等の被写体やファッションショーへの出演を経験。「それまでは、仕事はひとつだけ。夢を持つてはいけないと感じていたけれど、芸能界の人達は違った。今まで小さな世界で生きていたなあと思いました」。

【逆境から誕生した新プログラム】
とんとん拍子で始まった「美人英会話」だったが、まもなく新型コロナウイルスの感染が拡大し、オフラインでのイベントやレッスンが出来なくなってきた。「数年後に取り入れようと思っていたオンラインレッスンを、今すぐ始めよう」。二人でZoomを研究し、わから



時流を取り入れた新スタイルの英会話スクール

—アーティストとファンの関係性を築く—

BIJIN English

●美人英会話 代表
クラーク記念国際高等学校 非常勤講師
株式会社MONA concept 所属モデル
亀井 優希さん — KAMEI Yuki



高等学校の非常勤講師を務めつつ、22歳からモデル事務所に所属。今年1月に、自身の英会話スクールを設立した亀井優希さん。「学生時代から、英語の教員プラス、何か新しいことで起業したいという野望を持っていました」。好奇心を原動力に、たくさんの人と出会い、様々な環境に触れていく中、ある日突然、その「何か」は「美人英会話」として花開いた。短期間で次々と展開するそのプロセスや運営スタイル等について話を聞いた。

【出会った瞬間に閃いた「美人英会話」】
起業のきっかけは、昨年6月にオープンした多機能型宿泊施設「LINDA HOSTEL 106」。併設するカフェバーでは、国内外の人達と交流できるイベント等を開催しており、旅人やカメラマン、システムエンジニア等、多様な人達が常に集まっていた。その溢れるエネルギーに惹かれ、亀井さんも顔を出すように。そして、年末のボードゲーム大会でネイティブスピーカーのShionちゃんに出会った。「会った瞬間、急にビジョンが広がって、一緒に美人英会話をしませんか? って声をかけたんです(笑)。「美人英会話」というネーミングもその場で思いついた。お互い好奇心旺盛なため、意気投合。「来月からここで英会話イベントをさせてもらおう!」と、すぐに話がまとまり、1月からのスタートが決まった。

いくつ夢を持って、ぶっ飛んだ内容でもいい。新しい環境に身を置くと、周囲は何かに変化を齎している人ばかりになった。



■「新入生の会」を開催：多くの新入生が初登校

9月23日(水)・24日(木)、エミリー・ホワイト・スミス記念講堂にて「新入生の会」が行われた。

この会は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のために中止となった入学式に代わって、新入生を歓迎する行事。いわゆる「三密」防止のため2日間・5回に分けて行われ、講堂入り口での体温確認や学生間の距離をとるなど、万全の態勢で感染防止策を講じての開催となった。

「学長のことば」において齊藤言子学長は、新入生を歓迎する言葉に続いて、「どのような状況に置かれても大学と皆さまはつながっており、私たち(大学)が皆さまを思う気持ちは変わりません。一日も早く従来の神戸女学院大学の本来の姿を取り戻し、皆さまに神戸女学院大学に入学してよかった、神戸女学院大学の学生でよかったと思っただけのように心を尽くし、全力で取り組みます。」とこれからに向けての姿勢を語った。

参加した学生はほぼ全員が初めての登校。オンラインで知り合った学生同士が、初めて対面で会い喜び合う場面が多々見られた。

■交通広告を掲出：教室の黒板を背景画像に

9月21日(月)から10月4日(日)まで、交通広告(電車内広告)を掲出。これまでに引き続き、阪急電車内のドア横広告での展開であった。これまでの文字主体の広告スタイルを踏襲しながらも、今回は背景に文学館内教室の画像を使用することで、ビジュアル性を持たせた広告となった。

タグライン「私はまだ、私を知らない。」を制定した2017年から文字主体の広告スタイルで掲出してきたが、今回でいったん区切りを迎える予定。なお、区切りを迎えるにあたり、これまでに掲出した広告をまとめたWEBページを本学公式サイト内に設けた(QRコード参照)。



■後期授業がスタート：前期に続き授業は基本的に遠隔化



新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、2020年度後期も一部を除き遠隔での授業が基本となった。遠隔授業においては、前期に引き続き「遠隔授業サポート室」が設置され、ICTに関する知識を持つ職員を中心に教員や学生のサポートにあたっている。また、遠隔授業のツールである「Moodle」のサーバ増強を行い、授業環境の改善を実施した。

遠隔授業を基本としつつも、卒業論文作成に関係する一部のゼミや、音楽学部でのレッスン等の必要性が高い授業は、一部対面での実施となっている。また、図書館やキャリアセンターでは事前予約制での利用が可能となっている。対面授業や施設利用にあたっては、消毒用品を教室等の学内各所に設置するとともに、学生が空き時間を過ごす教室を確保するなど、徹底した感染防止策をとっている。

■神戸女学院 創立150周年に向けて：特設サイトをオープン

学校法人神戸女学院は2025年に、1875年の創立から150周年を迎える。その5年前となる10月12日(月)、創立150周年特設サイトをオープンした。同サイトでは、シリーズ企画としてまずは神戸女学院の歴史に関する動画を公開している。

サイトオープンと同時に、創立150周年ロゴマークの募集も始まった。応募資格は神戸女学院に在籍する生徒・学生・教職員、同窓生、旧教職員で、応募締切は12月11日(金)。詳細は創立150周年特設サイトに記載している(QRコード参照)。



- 本誌へのご意見、お問い合わせ：神戸女学院大学広報委員会 〒662-8505 兵庫県西宮市岡田山4-1 / E-mail kckoho@mail.kobe-c.ac.jp
- 新型コロナウイルス感染症拡大の影響により記事作成に制約が発生したため、今号はページ数を削減しての発行となりました。ご了承ください。
- 取材に際しては、感染予防策を最大限に講じた上で実施いたしました。